

も亦不可分に考へ得る。題箋に

古唐畫

地藏菩薩御影 報恩院憲深僧正譜

とする。憲深は醍醐寺成賢僧正に就て受戒、報恩院に住し、建長三年^{西紀一〇九一}醍醐寺に主となり僧正に任じ、弘長三年九月六日^{西紀一三二三}寂、壽七十二と傳へる。今その筆蹟はこの傳稱を信ずるの外、他に徴すべき確な例を知らないが、圖と贊の關係の直接的なるが故に、之も一所據として圖の製作時代の推定に資するものであらう。

之を古唐畫とする鑑定に就ては、この特異な構圖を描いても、例へば手法に於て地藏尊の口の焦墨線の端を鉤形を描いて筆を起し、その線は口の中央にてV字形線に中斷せらるゝ如き、駕雲の墨描線に沿うて胡粉線を以て勾勒する如き、地藏尊、童子の袖裏に見らるる白地に並行線間を一つ置に朱隈を賦する如き、或は風俗に於て地藏尊の明かに袴を穿つ如き等、奇異にして支那的と思はるるものを見出すが、之等の諸點は他の佛畫にも屢々認めらるるものもあり、綜じて支那畫よりの影響乃至臨摸の結果と考へる以上に出で得ない。寧ろ大體に地藏尊の形相特に顔色の如き鎌倉時代の他の作例と共通するを見る。手法に於て又同様であり、全體に互つて極めて細く筆勢なき描線の性質、或は夫々の

内外彙報

白鶴美術館開館記念陳列

去る五月二十七日より六月十日に至る二週間、白鶴美術館第一回記念陳列が行はれた。同館は關西に於ける蒐集家鶴堂嘉納氏の古稀記念の爲に設立せられ

内外彙報

肉身に於ける粉白、若くは朱、褐の具、服飾その他に於ける群青、綠青、朱、粉白、褐等を配合せる色調は決して和畫として奇異の感を與ふるものでない。僅かに光背周縁のみに截金を認められ、背景に一面に水波と思はるゝ墨描を微かに留める程度に畫面は暗黝を來すが、その色調は當時の金彩の盛んに使用せらるる例に比して著しく裝飾意圖は抑制せられ、むしろその低調な描法は特異な構圖と共に、主題に關して物語る處を靜かに聴かしむるものをもつ。猶ほ付記すれば此の畫絹の二分置き位に太き經を織込み、讀の地はこの絹とは別なる草色綾であることも通途に異なる處である。(熊谷)

六 浦上玉堂筆玉樹深紅圖 富山縣 馬瀬清九郎氏藏

八曲小屏一雙之内 紙本淡彩 竪五八浬 横約二・八〇米

七 浦上玉堂筆山雨染衣圖 岡山縣 大原孫三郎氏藏

掛幅 紙本水墨 竪三六・〇三浬 横三一・八浬

(以上脇本十九郎「玉堂雜考」参照)

たもので、財團法人の組織に據つて毎年春秋二回公開し、文化事業として社會に資せらるると聞く。主事山本規矩三氏は永く奈良帝室博物館鑑査官補の任に當られし人。同館の美術品の保管、陳列等諸般事務の圓滑な運行と共に同館所藏品を一般的に認識鑑賞せしめらるる事を期待せられる所である。その蒐集品は既に白鶴帖にその内容を窺ふことを得るが、更にこの陳列は圖録として江

湖に紹介せらるべく約されてゐる。左にその目録を再録して此の報導を飾らんとするものである。(熊谷)

唐金銀平脱雙鳳紋鑑	一面	槌製金鑲蟠龍花鳥彫紋蓮花形大銀盤	一箇	來國倭作 在銘	一口
唐金銀平脱花枝鳳紋八花鑑	一面	周饒饒鳳饒饒紋大尊	一箇	鍍金龍雀刀 金環付 朝鮮出土	一口
唐金銀平脱花枝八花鑑	一面	漢金銀彩渦雲獸紋獸環大壺	一箇	鍍金矛 玉鏢付 支那出土	一口
隋貼銀雲獸紋鑑	一面	漢金銀彩渦雲獸紋獸環大壺	一箇	鍍金頭槌劍 神代記、簡歩豆智ノ劍ト稱スルモノ	一口
唐螺鈿鴛鴦寶相華紋八花鑑	一面	以上二點、民國十七年陝西省鳳州府出土	一箇	刀 無銘	一口
唐鑲金寶石嵌入海獸葡萄鑑	一面	秦獸耳蟠螭紋大盤	一箇	傳備前友成作	一口
周有蓋饒饒首雷紋尊 在銘	一箇	銅水瓶 法隆寺傳來	一箇	刀 銘三條	一口
周象饒饒龍紋尊 在銘	一箇	法隆寺金銅幡殘缺	二箱	三條小鍛治宗近作	一口
周饒饒饒饒饒饒紋尊	一箇	法隆寺几帳鈴	三箱	傳相州正宗作	一口
周饒饒饒饒饒紋方尊	一箇	勾玉 青瑛珪 大小四十箇	五箱	唐貼銀麟鳳華文八花鑑	一面
周饒饒饒饒紋尊	一箇	天平螺鈿寶相華紋八稜鏡	一面	鍍金香水壺 法隆寺傳來	一箇
周饒饒饒饒紋尊	一箇	天平雙鸚鵡紋八花鏡	一面	○	
周饒饒饒饒紋尊	一箇	菊御作太刀 拵付 丸龜藩主京極家傳來	一口	松竹白鶴圖 絹本着色	雙幅
秦飾鳳蟠螭紋盤	一箇	後鳥羽天皇御作 銘菊御紋	一口	下條正雄(桂谷)筆	
周饒饒饒饒紋尊	一箇	太刀 明治天皇御物 侍從米田虎雄へ下賜	一口	右ハ明治大帝實テ飯野ヲ給ヒシ幅ニシテ田中光顯伯ノ舊藏ニ係ル	
周饒饒饒饒紋尊	一箇	新藤五國光作 銘表ニ相模國鎌倉住長谷部國光裏ニ德治三年二月	一口	花瓶 東大寺油壺 本地黑壺	一箇
周有蓋雷紋尊 空足内垂小鐙	一箇	太刀 德川二代將軍ヨリ歷代傳來	一口	以上	

山元春舉遺作展覽會

六月十日より十二日に至る三日間、京都大禮記念美術館に於て、春舉の遺弟社中、早苗會の主催によつて、この展覧が行はれた。

初期の作品より、絶筆に至るまで、概ね各年の代表作と言ひ得るものを集め、この一代の巨匠が歩んだ迹を具に攻究し得たことは、雷に吾人の喜びに止まらず、この展覧によつて、今更に故人の印象を深く且、新にし得た人も決して尠少に非るべく、故人も地下に此舉を嘉し、その勞を多としたであらう。總計六十

六點、その數は敢て多しとしないが、概ね精玉の作であり、且御物、宮家御所藏品、大禮主基御屏風下繪等、平常は囑目し得ざるものを拜し得たことは、多幸であつた。この展覧に際して、春舉の初期の作品の多數に接し得られるであらうといふことは誰しも待望した所であつたと思ふが、その所在の探索に多大の勞苦が費されたにも拘らず、尙不明の爲、出品を見なかつたものが多かつたのは残念であつた。然しながら少數と雖も、明治四十年文展開設以前の作品十餘點を數へ、就中、明治二十四年日本青年繪畫共進會に出品された「黃初平」、明治二十五年の「楊貴妃」、明治二十八年養素會の爲めに制作された「唐美人」、明治二十八年頃の「雪山遊鹿」等は單に初期の作品として、珍重すべきのみならず、